

幻の書

酒井桂史『琇玉篇』解題(1)

金子義隆

酒井桂史は戦前を代表する詰将棋作家であり、その評価に異議を唱える人はおそらくいないだろう。

酒井には大正14年末までには自筆の作品集『王玉篇』50局のあったことが知られており、前田三桂、櫻井蘇月、「将棋月報」一記者(丸山正爲か)、前田を通じて有馬康晴も所持していたらしい。加藤文卓、山村兎月にも贈られたと思われるが、一本として所在は分らない。

これとは別に山村は昭和13年頃酒井作品集として『将棋王玉編』100局を編んで頒布しており、こちらは現存するが、果たして『王玉篇』の配列をどの

程度生かしているのか確たることは分らないまま今日に至っている。

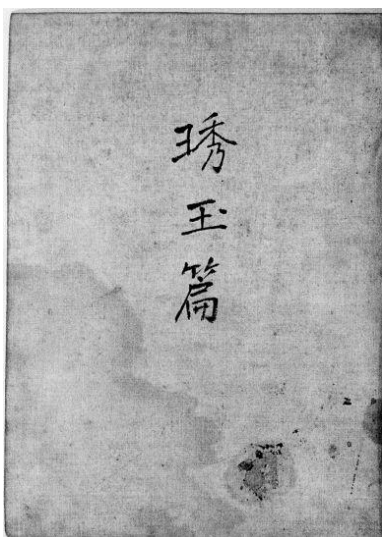
「詰研会報」No.291号(平成12年5月30日付)に森田銀杏氏の次の記事がある。

「15日に吉祥寺の安田啓二氏宅を訪問し、前田三桂から貰ったという酒井桂史の『琇玉篇』50番を譲られました。大正13年の手書き本。将棋月報などに登場する以前のもので貴重な資料です。」

その後「詰研会報」誌上に反応はなく、森田氏も『琇玉篇』(しゅうぎよくへん)について改めて書くことはなかった。一方、森田氏からコピーを受けた山田修司氏と岡崎正博氏は日を

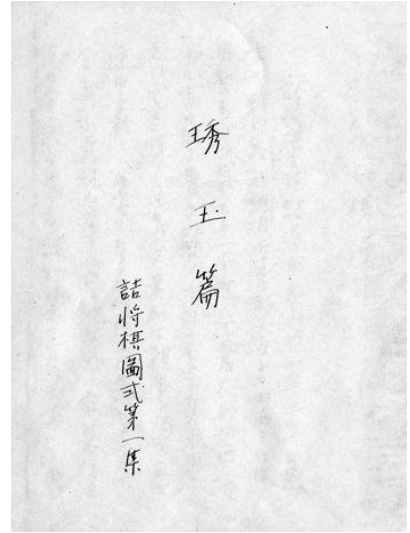
置かず50局すべてをテキスト化していた。当時私もそのファイルの恵送に与ったのだが、特に興味もなく閑却していたところ、近年「将棋月報」(以下、月報と称)について調べるうちにこのことを思い出したのである。16年後の今も『琇玉篇』は新たな読者に見出されないまま幻の書となっている。

幸い、現所有者の磯田征一氏より鮮明なコピーと関連資料を頂戴し、またいちはやく研究したお二人からも懇懇されたので、公表に至った次第である。



『琇玉篇』は紙に布をかぶせた表紙。138mm×101mmでほぼA6判、100頁(別に序文4頁)。表紙を捲ると扉「琇玉篇」(行

替え) 詰将棋圖式第一集」とある。



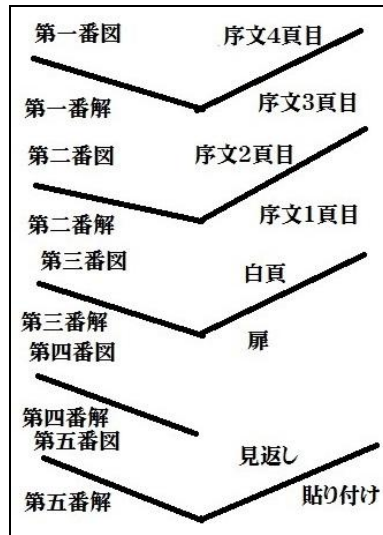
さらに捲ると「弄棋漫録」と題する序文が4頁にわたって続く。図面、解答手順も含めて酒井の自筆と思われる。

なお、安田氏が前田三桂から贈られた経緯だが、前田が月報に一時休載していた「失禮御免へタの横槍」を再開(昭和13年)した頃、新聞の棋譜の切り抜きを大量に提供したことへのお礼の意味だったらしい。

本題に入る前に、製本の状態について記しておく。

表紙裏に貼り付け・見返し、第五番図・第五番解で一葉。その上(遊び

紙?)、第四番図・第四番解。その上に扉・白頁、第三番図・第三番解。その上に序文1頁目・2頁目、第二番図・第二番解。その上に序文3頁目・4頁目、第一番図・第一番解で一葉。この5葉20頁を重ねて、糸で綴じてある。綴じ糸が序文4頁目と第一番図の間に見えている。

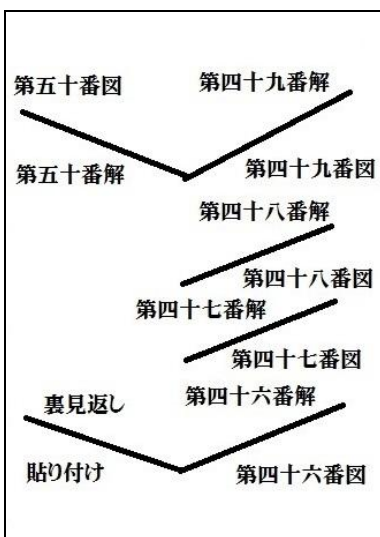


ところが実際には右図の通り(遊び紙?)の2頁分は切り取られていて、存在しない。従って、第四番図、第四

番解は単片で、バラになっている状態である。次の5葉20頁は第六番図から第十五番解まで。次は第十六番図から

第二十五番解まで。以下、第二十六番図から第三十五番解まで。第三十六番図から第四十五番解まで。

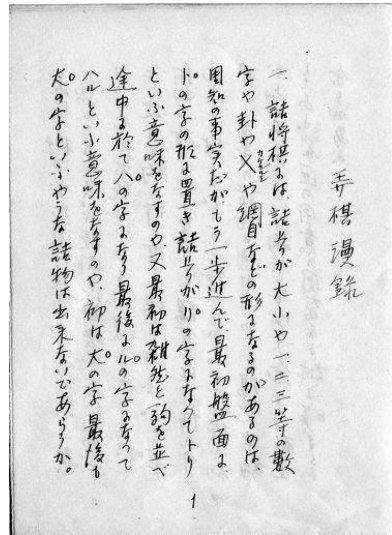
そして最後は、第四十六番図・第四十六番解、裏見返し・貼り付けで一葉。その上に第四十七番図・第四十七番解、(遊び紙?)。その上に第四十八番図・第四十八番解、(遊び紙?)。その上に第四十九番図・第四十九番解、第五十番図・第五十番解で一葉。ここだけは4葉16頁なのだが(遊び紙?)の4頁分は、やはり切り取られている。



無駄な頁なので切り取った、とは思えない。切り取ると単片となり、散逸

する可能性もあるからだ。元は、『琇玉篇』の成立や内容に触れたあとがきがあったのではないかと思う。製本後思うところがあり、切除したのではないだろうか。

「弄棋漫録」は序文らしくないので、あとがきがあつてしかるべきだとなおさら思うのである。



弄棋漫録

一、詰將棋には、詰上りが大小や一、二、三等の数字や卦や×(註)や網目などの形になるのがあるのは、周知の事実だが、もう一步進んで最初盤面にトの字の形に置き詰上りがリの字にな

つてトリといふ意味をなすのや、又最初は雑然と駒を並べ途中に於てハの字になり最後にルの字になつてハルといふ意味をなすのや、初は大の字最後まで大の字といふやうな詰物は出来ないであらうか。

(改頁)

これは一概に全然不可能事だと云つて了へない氣がしてならない。此疑問を解決する天才が一日でも早く出現せん事を切望して已まない。

二、攻方の駒を行き捨てる場合、例へ

ばとと金と何れを捨てゝもよかりさうな場合には人情の自然として誰しもとの方を捨てたがる。この心理を利用して看寿の詰物には前述のやうな場合、其駒がとであつてもよいに拘はらず金にして配置してある。名匠の用意の周密なる誠に嘆ずるに余りがある。

(改頁)

三、詰の最後に龍でもとでもどちらで王手をかけても詰むといふやうな際龍

の方で王手をかけてあるのが看寿の詰物だ。敵玉を討死させるのに、少しでも位の上の駒を以てして敵玉の死花を咲かせてやるといふ、優にやさしい武士の情けである。こんな処にまで看寿は氣を配つてゐるのである。流石に彼は名人であつた。

四、よい詰物を作らうと氣張つてかゝると、却つて出来ない。何となしにふいと思案が浮んでくるやうな場合に面白いものが出来る。

(改頁)

五、琇玉篇の次ぎを龍鳳篇、天馬篇、金烏篇の三篇として全部で二百局とするつもりである。果して此計画が成就するかどうかは、元より分らないが、自分では是非ともやりとげる決心である。

大正十三年九月三日

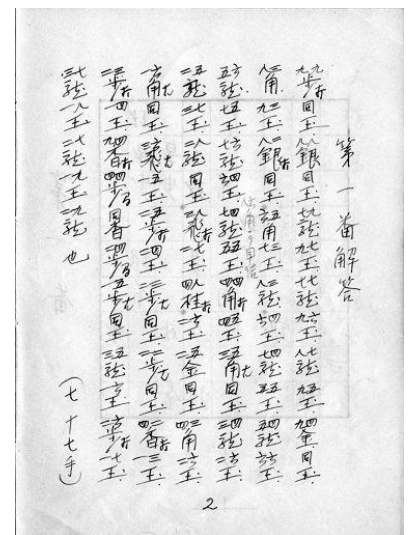
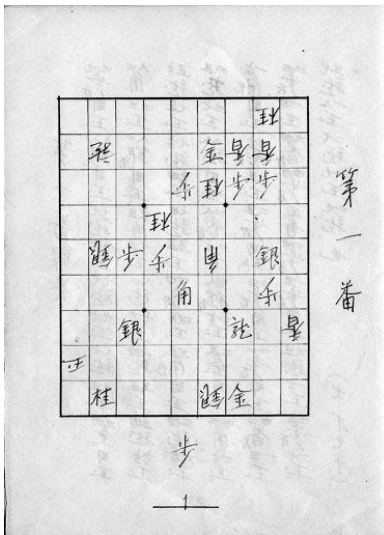
(註)×の右に「カケシルシ」とある。

大正十三年九月という年月が目を引

く。この時点ではまだ一局も発表していないのだ。序文はおそらく最後に書かれたと思われるので、既に相当数の作局があつたことを示している。

序文の内容について言うと、一・は立体曲詰に関して述べているが、月報大正15年8月号の「盤前漫筆」と重なる部分がある。「ハ」「ル」の字の例を挙げている箇所などは殆ど同じである。二・三・四・についてはこれに類する発言を酒井はしていない。そもそも、まとまった文章は「盤前漫筆」くらいしかないのである。五・は月報昭和13年11月号の前田三桂「酒井先生訪問記」とはかなり異なっている。そこでは「以前は君も得意の作圖百局を選する積りであつたらしい、五十番を集めて王玉編と稱した自筆の作圖を送られたことがあつた。夫れにはイロハ詰象形圖が半分程載つて居る後の半分は龍馬篇を作つて送つて下さるつもりであつたのが不幸病の爲に中絶したもので

ある」とあるが、ここでは龍鳳篇、天馬篇、金鳥篇と続いて200局の計画になつていたのである。大正13年から15年にかけて考えが変わつたということか。『瑠玉篇』は、序文に1〜4のノンブルがあり、図面はまた1から始まる。1頁1図で裏面に解答がある。解答頁は冒頭に「第○番解答」とあり、手順は一行12手。手順の最後に「也」が付く。頁の左端下に、漢字で(〇〇手)。全局このスタイルで統一されている。作品集のような体裁になつてはいるが、中身は習作集のようなものであることをお断りしておく。



作者による十分な検討はなされていないようだが、雑誌登場以前にどのような作品群があり、いかなる方向をめざしていたのか、その一端を知るまたとない資料であることは言うまでもない。

酒井の手順表記方法は月報に準じているが、本稿では半角数字とし、不成は「生」、「打」は重ねる場合のみ付ける。

変長作や変同作があるが、当時は完全作扱いでキズとも看做されなかったことを考慮して鑑賞していただきたい。